

是非を論ずる前にまず石井方式を試してみよう

「幼児に漢字を教える」と言えば、従来からの常識からして、とんでもない暴挙だと思うのが、むしろ当然だと思います。

私の主張は、長い実験に基づいて得られた結論であり、必ず世に入れられなければならない真理ではありますが、すぐに今の世の人々が共鳴してくれようとは、初めから期待していませんでした。

どんな真理でも、それまで長い期間にわたって、人々の頭を支配してきた考え方を変えるためには、常に、驚くほど長い年月がかかっているからです。

人間は、過去の“常識”という固定観念に縛られているため、新しい真理を真理と認めることは、なかなかできないものです。“常識”という色眼鏡を通して見ますから、ほんとうの色がわからないのです。その上に、人間というものは、自分で実験し、自分の目で確かめてみれば容易にわかることでも、物ぐさで、なかなか実験しないものですから、食べてみようもしない人に、その食べ物の味を教えようとするようなもので、真理を理解させることの困難さは不可能に近いものがありま

す。

新しい食べ物の味を知ってもらうためには、どうしてもそれを実際に食べてもらう必要があります。食べてみさえすれば、ともかくも味がわかります。味の良い悪いを言うことができます。

世の中には、食べてみもしないで、やれそれは味が悪いのなんのと、無責任に味を論ずる人が何と多いことでしょう。

私は、石井方式の良い悪いを論じてもらう前に、つまり、石井方式の味を論ずる前に、“石井方式を食べてもらう”方法を考えました。それが、前述のような“幼児の実際指導を見てもらう”ことだったのです。

この効果はてきめんでした。食わず嫌いも、一度味を知ったら一変するように、石井方式大反対の園長さんも、一転して礼賛者になり、“石井方式の実践者”になってくれました。昭和43年に始めたばかりだというのに、わずか一年の間に、百余の幼稚園や保育園の支持を受けるまでに広まったのは、“幼児の実際指導”を見てもらい、その真実の姿を理解していただけたからです。

しかし“幼児の漢字教育”を、初めて実施することのきっかけを作ってくれたのは、大阪市生野区の小路幼稚園園長、井上文克先生です。

ここに、井上先生のお書きになった文章により、その間の事情を、皆さんに紹介して、この序章を終わりたいと思います。

石井方式に拠る幼稚園教育

井上 文克

私が初めて石井先生にお会いしたのは、昨年暮、12月22日のことである。従って、爾来、今日まで、まだ三ヶ月しか経っていない。にも拘らず、今ではもう百年の知己のような気持で、先生の御指導を受けているのである。

大阪ではかなり知られた幼稚園として、“文化幼稚園”という名の幼稚園がある。この幼稚園の宮地武久先生が、ぜひ読むようにと言って貸してくれたのが、石井先生の『私の漢字教室』と『一年生でも新聞が読める』の両者であった。これを読み始めた私は、覚えず最後まで一気に読み通してしまった。

読み終わると、すぐにも石井先生にお会いせずにはいられない気

持に駆られて、早速、長距離電話で先生に会見を申込んだ。すると、いつでも会うという御返事である。私は、寸刻を惜しんで、直に伊丹の空港に車を走らせた。電話で会見を申込んでから三時間後には、私は、石井先生のお宅で、先生と向い合って、親しく語り合うことが出来たのである。

それから更に、数日を置いて、今度は泊り込みで、十分に先生のお話を伺った。私は、先ず、先生の教育に対する情熱と信念の強さに打たれた。と同時に、先生の驚嘆すべき努力を以てしても、今の公立学校の実情から観て、所謂石井方式を公立学校に普及させることは今が限度で、これ以上は不可能に近いことを直観した。

石井方式の普及は幼稚園にこそ在るのではあるまいか。とりわけ、私立の幼稚園では、公立の小学校と違って、いやしくも子供たちの為になることであるならば、何処の誰にも気兼ねなく、自由に実施することが出来る。そして、もしも石井先生の御主張通り、漢字が幼児に適した文字であって、幼稚園在園中に、漢字がすらすらと読めるようになるならば、その時には、小学校の教育も、勢い改めざるを得なくなるであろう。

そう考えた私は、その事を先生に率直に申上げた。先生は直に了解して下さい。そして、その後も懇談を重ね、年の改まった1月の20日には、私の幼稚園において戴き、園児に対する実施指導と、石井方式の解説とを、お願いすることになったのである。

私は、先生の著述を拝見して、漢字が、幼児にとって少しも難しい文字ではないことを、知識としては十分に理解していたのであるが、さて現実に、目の前で、自分の幼稚園の子供たちが、相当に難しく思われるような漢字を、平気で次から次へと読みこなして行くのを見せつけられると、まるで嘘のように、又、魔法でも見るような気持で、唯々驚嘆する思いであった。先生は、お伽噺をしながら、その中に出て来る、登場人物や物の名前、主な言葉などを、園児たちの見守る中で、黒板に書き付けて行く。勿論、それは、子供たちが今までに見たことのない漢字である。その漢字は、その後、その言葉が重ねて使われる度毎に、いつも先生の手によって指し示されるだけで、漢字についての格別の説明は全くない。こうして、物語が終る頃には、黒板は、2、30の漢字(その中には、“昔、お爺さん、お婆さん、山、川、柿の木、赤い、大きい、実、女の子、都、風船、雨、烏”などがあつた)で埋まっ

たのである。

さて、お伽噺が終って、先生が黒板の漢字を指さすと、もう園児たちは、それらの漢字を皆覚えてしまっていて、何のためらいもなく、元気な声で正しく読む。2、30もの漢字を、どれも間違わずに読むのである。それは正に感動的な、実に驚嘆すべき光景であった。

この光景は、この日、この会に招待されて出席した大阪市内の幼稚園長たちには、真に肝に銘ずる驚異であったに違いない。早速、「こんなにすばらしい教育は、直にも採用したい」という希望が、参会した園長たちの間に、期せずして起つたのである。

それで、「石井先生の実地指導を、私の幼稚園でもぜひ」という希望が、後から後からと私の所に殺到し、そのため、二月から三月にかけて、石井先生の休みなき指導行脚が続くことになったのである。

お蔭で、三月末の現在、大阪市及びその附近で、合計一万余の園児を擁する40余の幼稚園が、そろって、この四月から石井方式を実施すべく、唯今準備中、……という所にまで発展したのである。

(以下略)

(国語問題協議会解放「国語国字」第45号)